12
へ9
3869
76

へ9
3869
76

新増用文筆道大全　全

此度の新板ハ用文章の神髄の御書様日々入用
の文章[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]書法士農工商碁[illegible]書画詩歌連
[illegible]
禁中御門[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
集む[illegible]大全の書なり

俳諧小紫垣序

前編青木綾後篇ハ
世ニ行はるゝの数篇
梓して世に行るゝの流
れ四篇ハ及ぬ今や雄田
何某四方名人の奇句新
句書く拾ひ洩らされ集
て小紫垣と題して
五篇となしぬ此道此

大正七年十二月十日寄 室井平藏氏贈
3942
76
10

特
へ9
3869
76

ぬ士を秀吟奇や田
楽命〜人事を初〜作
れ〜しと爾云

唯幸文化の一〜足

有軟也

題次列

一 狩ひろう　二 一〜〜之
三 ちひ並べ　四 発花之ろう
五 戴ひ〜〜　六 いつまでも
七 いさだよひ　八 いぢ〜きて
九 色ろく　十 いと〜物
十一 疋で　十二 廣次にで
十三 ろくよいて　十四 櫓を押
十五 ろう含〜　十六 ちちびろう

十七 まめいて
十八 花やうよ
十九 去面り
二十 恥を恥る
廿一 強うんで
廿二 搗う出来
廿三 白ハして
廿四 苦ひ事
廿五 仰と山で
廿六 若ぶうそ
廿七 きこくと
廿八 狐やうず
廿九 あれうと
三十 中ろへナア
卅一 本気なも
卅二 細うあう
卅三 場とでも
卅四 ろうきうと
卅五 ろうとして
卅六 罪を見て

卅七 ろやくと
卅八 ろのくと
卅九 返ゆして
四十 下まるうま
四一 矢毒して
四二 をだうず
四三 くけめり
四四 彼まして
四五 取り分て
四六 迫もうう
四七 解合ゆく
四八 遠ひうく
四九 まどうあい
五十 とう放し
五一 拉んして
五二 智恵出る
五三 地面うんく
五四 智識ても
五五 恥辱でも
五六 ちひと羽

五七 おとづ
五八 遠やせぬ
五九 ちろろと
六〇 理非つゝみて
六一 好屈やく
六二 暗乳して
六三 ぬとりのく
六四 ぬつぬろと
六五 遠ふゆろよ
六六 ぬろひ影で
六七 ぬろまやとぬ
六八 ぬくゆりく
六九 塗り出し
七〇 爲ろしやく
七一 敷が出来
七二 ちびげるふ
七三 奥ぶか来
七四 勇りこせ
七五 抱まきて
七六 かかしさよ

七七 弟ろひて
七八 ヲフトろし
七九 ヲくゆゆり
八〇 ヲくせふし
八一 ヲゝ休る
八二 遅ろけく
八三 及ひぐし
八四 かいろん
八五 納まろく
八六 るづれく
八七 ろやいて
八八 弟ふきく
八九 猿月もふた
九〇 ろろそも
九一 面ひ引ぐ
九二 侍りぬで
九三 影出して
九四 かきろげて
九五 浪しても
九六 形ようく

九七 髪ゆめく
九八 風ぐ琴り
九九 まゆ時しや
百 鼠の口
百一 よひそく
百二 よそよそて
百三 垂ぐ世ゐ
百四 脇ひく
百五 形よ入く
百六 暑ひろ
百七 大それ〻
百八 ちゆえん
百九 逸逸り
百十 活潑して
百十一 七夕じや
百十二 出てそて
百十三 孔雀
百十四 きゝゝや
百十五 例よう
百十六 それどやて、

百十七 そう晴く
百十八 油あひ
百十九 縁へよう
百二十 そつと出
百二十一 それい
百二十二 ゆうして
百二十三 月夜でも
百二十四 つるがれさ
百二十五 突出して
百二十六 弱そと
百二十七 恙ぐるふ
百二十八 続りして
百二十九 急沢り
百三十 森てたう
百三十一 弱ぐりく
百三十二 森入りる
百三十三 中ぐよく
百三十四 何いそも
百三十五 肉ぐく
百三十六 えんのそ

百七 波風なう　百八 なんぞでも
百九 来年は　百十 丸さとぎ
百一 ひしくと　百二 ゑぢやもと
百三 むつうん　百四 絹掻く
百五 嘆くして　百六 待ぶ雑ひ
百七 晴さる　百八 待ふく
百九 味ひハく　百十 蝉ゝ鳴し
百一 のう雑く　百二 後の幸
百三 のこぎうて　百四 歌ゝこそ
百五 ぬりあてふる　百六 のぶうう

百七 振結つて　百八 ぐとくと
百九 ゐるよるう　百十 口惜しや
百一 ぐるくと　百二 ふ〜稀
百三 ふけやくと　百四 ふつときて
百五 心一ツ恵　百六 小独居て
百七 ゑぐみて　百八 ゑふくゝと
百九 さりてい　百十 コリヤ奇妙
百一 コリヤ迷惑　百二 小縛ふ
百三 什垂うう　百四 果報者
百五 くゝぐ合ひ　百六 ふり身

百七 やうく と
百八 やさしさま
百九 やうろうる
百十 弱弟して
百一 心誠えて
百二 まごろしん
百三 二ア行く
百四 二アそふよ
百五 又じやノ、
百六 待ちみせ
百七 やーしんと
百八 まんぞうあ
百九 待ちよさ
百十 ちみもえ
百一 永末でも
百二 喧嘩して
百三 ちみとひす
百四 けありぐり
百五 あまうして
百六 ちうあり

百七 二人して
百八 吹ちんく
百九 吹ひ
二百 まぢみて
二一 丁度ようひ
二二 テモ平ひ
二三 まと慶げ
二四 熱くよ
二五 天晴じや
二六 熱くよう
二七 あんまりしや
二八 形しん
二九 あさふさ
二十 足おう
二一 あんだれうん
二二 弦やえ
二三 酒しわ十ア
二四 あつくて
二五 強ひちり
二六 されハとよ

一百七 沙汰する
一百八 おぼえして
一百九 拵さして
一百十 さハぐしん
一百十一 さゐしくや
一百十二 風もしく
一百十三 さり世ハ
一百十四 気がるん
一百十五 切りえく
一百十六 気がすまぬ
一百十七 紛せして
一百十八 きぐんやう
一百十九 安さつけ
一百二十 安くこと遠く

一百二十一 二人して
一百二十二 吹うんく
一百二十三 ひ
一百二十四 多ゆふて
一百二十五 丁度ひ
一百二十六 テモ早ひ
一百二十七 ほと度げ
一百二十八 熱くゐ
一百二十九 天晴しや
一百三十 弱くよう
一百三十一 あんやりしや
一百三十二 形しん
一百三十三 あさふさ
一百三十四 見おう
一百三十五 あんだんふ
一百三十六 弱や先
一百三十七 油しゐ十ア
一百三十八 あつくて
一百三十九 強ひりう
一百四十 されバよ

附小柴垣
雄田一樹選

一 ひろう

柔の親 松乃美

切り菓 卯る 春天

解 丁へ 変る 菱垣

百文 ハ 死 少 歪屋

細字の文 入る 弄 鶴

寒 屋を洗 賀屋

新店晴しき狂哥の

㊁一くに

妻が穴つく旅日記
お家かゝりする丸子
硯ぶたの菓のぬし
花の名つける画師の妻

㊂云ひなさで

珠数の音高ひ説経まゐり
茶柵光らん老女房
万病に利くまや薬

献立ならぶ吟じ女丈
家守りに恥をかゝす後家
社家へ通ふ素人茶売り
子に名を付る捨て誘

㊃高地より

名ある蔵元着が二人来
縁の方向こう奥首
どちらもぬくれのおいとこ
通座は怒って出つる芝居
二階から嘘ふきなん之柏

いつそ一トハ人に客ハ成
嘉が埋んざ迷る時ぶ
欲ハ放きく舞おお
猿をくぐきぬ打乃張り
室まぐ近ふ京の虫

五 載ひく

面ハ恵さの切ます雲
浪世と送る思ハ変
扶桑の嘆ハ酒の酔
脊たるふるの春さく茶

下弦信つく吉ぬ掛ア医者
狀ハ味ぐる 古茶 粥

六 いつをも

弾よ奴の舞ら仲居紙屋
嘉ぐぬ猿の 世捨人
雪乃重 ふん高北庭
ちんぷでごぐる大初識
幕 立ラ さを初ぐ吉紙
石弦 軽ぐく 立紀仁
組重のぐる 新聞屋

釣りして居さんかゝ馬
初ナ名て居る小角力五

七 いさぎよし

小判投ちの大関
鬼うち出し三年男
天秤 並ぶ大三十日

桃の林より義を固む
拳乃死競をとる長し

八 いちうさし
熊の話 北海道の話

仇義ゑ 居る月囲ひ
自勝ってみる後の母
森光を遂ゑ後く小湯

九 色々くく
悟気ゑくさ嘘の親
母ゑを求める撰挙ゑ
書生ゑ偽る加ゆ変
変化ぬ江戸弦の角力五
鯉麻ゑ後 約親
白梅ゑ十ゑ 猫ゑ

十 いとぐ糸

天狗よりうさぎ糸の義
鬼ハ空梯ゝ望くれ易
旅くらのいふ雪像る歌
書も恥あらくべ舎
夫の意しい出用干
後家とりがす女脱凡
せうしんの睦じき

十一 一足ふく
紅傾ろ沢川螢

百足ふくしん祖仙の重
ミつるの四ツ鬼歳老女

十二 寡次口で
つんざいいらん大女房
一部ン ふひ心 夫々
入り琴り結つ市の姫
戸柵の寸ンを五ゝ屋
意ゝのうるゝ五の裏
意しさ浸ぐ之姿
金奥煮りまつ毒竹下女

十三 ろくよみ
つるめ 鶴の 子
一ふく 味ひ 庭 他
十四 擼を 押て
きぬく 山ろく 去す 神
蔵子 窄 ろく 切 月 足
大 紬て 天 宮 寺 丁 雅
十五 張 合 ろく
日 栃 味 あ 沈 梅 揺
彩 ま 拂 ひ の ろ 蔵 ろ

本妻も 切 有馬の湯
十六 たちまち び ろ
高 ろ ま 宮 ま 百度い
あ の 食 あ ろ 城
社 も ろ づ む 寺 迷 殊
裾 の 切 ま ろ も 高 の 彩
嶺 乃 ま も 彷 仕 出 居
宿 変 端 ま ま ろ 亜 屋
十七 春 め ま ろ
金 采 彩 芳 ま 成 寺

猪ゑ
茄子の咲町をぐき
聳と迫ひの小俵紅
嬢蕎麦るを乱る蔦く

十八 花やうて太て蓮
蔚綾 拾よ太夫藏
炉ゑ仕る大信金
花ゑ迷ひ一盞の廣
楚ひの門を有る院家
俵哦へ引く寺の家宅

概え仕事太夫藏
三味箱付さ磬の家招
曲掃引くのも迫さ地

十九 喜多不
酒の百する代貫本家
答うけゑを栄乃唐
彩も義る伽藍深
紀州の宛さぐる書
あう会酒乃旅心
妾と丘那の拡ま義

獺〻皮もくらの閑居

(二十) 恥を忘れも

掻く〻猫の切しまゝ

よひ美季まする三百目

蛇よ山猫出て舅

妻ゑ〻しぐる妻乃文

猪て延し下川原

(二十一) 張こんで

ふくう猿よたる毛剃

絶るの間三ツ夏みかん

(二十二) 猪う出来

高麗の毋級よ味

通りう駄〻減原女屋

弓砂糖古すする藪医

(二十三) 白ハして

藝子の傍を三ツ仲居

胃ぬぬぎ掻毛妻

去産の墓乃曲る組文

九山でめくる毛唐人

神にも寝やにも手

㊅四 紛ひ事

砂糖漬に入る者

身にある人と呑兵慶

酔りもとる老子

廣敷に居る閻广遊て

毎日毎に一別家

㊅五 行く山ぐく

噂にも逃る入こ賣

独りまへする倦る銭

海し呂のり髭男

㊅六 荻が下りて

子評の出る父母の情

兄の精霊参る亭

歓座を放せて子持禁

八百屋にまかす島座町

樵しく鉋を姓

味酔の手引く揚屋

喉さんと色の種る母

㊅七 まこうくと

七ツ拵へて　桶の上
塩をふる　ぬ　鉄　鼠耳
油利足外　同　母　彫

(六八)　服やうう
汚れ　ぬ　鼠の尾
淋しい　筋をとり　二人
皿箱に　猫入れる　金

(六九)　水引とり
掛　二束　一ツ
白ひ袋を　拵へ　紙屋

二階へ　汲くり　焙茶
座　扇る　妾の　母
孫　足　尼る　蔦る
彫　さくる　水　新
彫　める　雲　はめし　尼
(三十)　おくれ
屋の　博　蓋　尼る　蔦る
伴　を　きんきがら　女主
高う　足　る　猫　門
吹　とり　抑　次

ちぬ鯛に若しけぬ妾
癩り係つく名勇夫
斎が蒼いぬ黒砂糖
世拿が絶る手巾哉
妻いろくがる花摸の井
縄ぎれ迎る嫁菜摘
袖しら一歩悲し紳右
㉑ 新ばゐるくも
本風の枝にかゝる哉
鳴る手に尾とのく忽ち

嵯峨り一生味あらし
尺送る船によひ追風
あつこん太舞ひ振る布袋
聾が拾ふ文弥節
㉒ 細うなり
家系を継りてきく丁稚
山帰来のむ角力取
一点のみから庭竈の灯
㉓ 墳までも
手て阿弥陀仕て喜ぶ後家

遠里とつゝ地獄あり
うつゝとくぬるゆの中

四 ゐつゝちゝと
哭くゝ嬢梅女房別
ゑゝゝ哭くゝ嬢の香
独り眠のごく二日酔ひ
ゑゝ山ちまで行ぐうけ
何で酔ひ酔ひ
五 ゐゐゐゐて
費銀分ゐる義理

ゐゐ義つゝも先義
切合ひゐまく秋の函
いつゝ神ぐより遠くゐ

六 里を見ゐ
年 誂言ゐ
船頃記す砂奥向屋
嫁業を罵ゐ休見源

七 ゐやくゝと
ゐと孫連れさ方ゐ
ゐ丙ゐ麦乃毛

為後家為る且始寺
孫よ盃さを年始
肯味しを寸る饒長
孫の靈りを為る百性
乳房をたるす風車

(四八) 不乃くを
足ふふ鳴よ嘴千鳥
江を漕く舟と梅薫
鳴よ流る家り母
蕎麦屋四叩く和ふ

俄を流る弥生
(四九) 返るして
主う切うる歯業屋
意乃彩穴しさうとんの為
鰐勤う為る後学
(四十) 下手るるうう
よひ世常とる乗焼所
鞠場へ出るゆるし色
二律の級も答で関
駅の立する町製結

たゞ其味の面白き人
色々の作く旅宿者
本妻らしい婆の孫
菓子撓味ひ内料理

(四一) 矢面して
古ひうめ干る和菓堀
毎日死よ切ふ浩
家鶏を干る庶の煮
(四二) 亀だり舟
岩と苔るの中のよさ

別樂を吸く孫竹
滅士の湯りを砂る貝
開るれさ分の情るさ
関羽乃江戸居蓋
濃をり かる官薩
(四三) ち春かて
笑ふく分ろ辻角力
一ツ結んさ絞ふ叶帯
尾佐よ尺をる掬の発
一本奏る昆布書屋

四 仏をして
仏為の瑞を見せる関
新の玉示をとて為つる
仏矢尺がてゝ雙乃新
四五 取り射て
紋日約束する蕪る
美緣もふ屋上る
うぞん格乳を舎る
出はぐ幕を切る悲
百万遍すあく書

四六 也も形
多がんまふしてゝん
主も女房て毒てんん
ぶしゝ名所明る又
曲輪ぐ尺ゝへ新の雪
尾ゝ解ケよ雪遠ア
四七 解合ゝ
鳥の脇ひ重ひ座り
着て挾む大子の体
窠弓丸師る岳女房

乗車ようしゃ中縦
大事とまこへ畏り
同じ蓋冥ふと妻と妻
熱意を多の喧嘩沈
お山のそ他の家ハよ他
夫婦の弟のかを彩
(四八) 遠ひの
女房も考ふ掛ケ硯
漆のまよする美見
ごちらうひ日投屋宿

乃印吐しの中よ表
毒忌変ぎ毋の文を
主中ろく布る松の親
きしの涉ほを考る妾
(四九) とめどのうひ
楊門浩る去よ綱子引
己のうぐきし三荷入
酒屋ハ寝ぬ沢しく女房
七文書ル宝ぐけ
庭よ出合ふ乃不藪入

五十 放し

奥よハ俗に大殺茅

客殺ん さしおく

彩色り 繁茂

入れこまる出ず大之

抹り持 ゆる塞 翁

五一 得ん しく

翠剃 とつる 眺光

姉の為まで と出る盃 折

鞍の方 ゆ ゆ

五二 勢惠おして

ゆ も ハ 雄ひ女 蔵

澤 ゆ ト へ 酒 れ 綱

板を 作 作 作 妾

蔵 ぬ おく 奇の 石

昧 ま ゆ 雄 ひ ま

た 丈 妹 ま 老

碎 ん 蔵 奇 カ

手 打 床 ま 小 俗

小 殺 さ 花 乃 俗

釈迦ヶを尚る料理人
あごたひをする高
日月イで深むしひ男
風呂熱く樂く大丁雑
竹の皮拵おつ少り船
肉蒸ぐ煙よくるお山
拵重んと冥土屋
やく〳〵拵と新の串
寿ゲ祝ると此酒し而
喰ふ森くいる糸屋

(十三) 地面ふく
第拵くる送り猪
犯なぬ先ん〳〵赤石焙
中山を沼る岡乗屋
引と多放る沢小擂屋
形水拵る仁乃塔
俗と耳く宇海沢
(十四) 多識ても
鯉の拵ひとする孫赤
孔を合しと竹ぬ人

月雪花ハ人の外
外面乃ぬ 新生へる
五五 恥辱ても
却て 高らが 新く 彩
美理ある 銀ふ 狂く 関
胯を 潜らハ 垂を 潜る
猿ハ 猿十ウ ふへ 軒新
六六 ちりと 仰
如房 自慢をする 男
お心を 驚で 歩り 客

リント 拭ふる 茶屋 拂
雑用 さまする 新仁 客
五七 おトづく
祖父をそむる 張氏 花布
父へ帰 糸の 袋 祈 紙
吏ト乃 撰をする 森 酒
丁雑 ふ まぐも 嫁 狂 母
糸も 強く 後の 素
拾子 明て 垂く 庭 自慢
古用乃 雪を きふ 高

毋もを出れば屁布

(五八) 遠やせぬ

物人へんを指の底

あそこやこに拭れ

佐り店のぞく武義場

合筆よ髭なぐこの乳

毋を脊ゑぐ第ゑ又

袴そぐち付屁ぶり

(五九) ちちつうと

棒を利しく井弾

花よ情くけ小傍

帽子の笠ぬよい女房

ふり紬蓋ゑする怪気

毒の名ちて出る切燈

偶ゑ目を拾切乃弦

ふゑよ京と来る銅切

雲の業居ゑ出会ひの弓

猿縫うてくる針みる

(六十) 理非ゑけて

如何郎ゑ痛毋織

女命又ハ理つける 歌
考ふてくれと答ふ宿老
妻を老毛 ふた男伊達
又改 名歌 小盃
あの中ふよ吉ぬ小灯燈
女房もあ小乃風
あも本作ぶ夏夜
ちイさせる此呑ミん
味屋の書の蜂が鳴
(六二) 理屋 居いふく

猫の命のうすひ老女房
李白が愛ハふ多ぬ待
(六三) 猫 気して
出る猫くる急ふた
吹くも猫へぬ釜の下
通るき世るの抓るめけ
ちくく窓剥る学ん
芹白ケさるて抓を吸し
(六四) ぬくをけて
芝居の雪よ寒る嵐

抽釜くゝ老の筒井筒
氷ゐるけく雪は肌
小雪丸方隠る窓
紙冷しゐる紳人笠

六四 ぬつぷるゝ
逆ひ抜ひゐる小紋
清くゝ子ゐを抱く蓋子
生花挿す新庵を
高門修る麦の秋
光丸く元を形生ら

耳ゐりゐる待車
踊つゝ新ぐ戻る婦
太陽と弟の老女房
味ゐひ夕級清の高張
長季を仕ゐゐ女房

六五 繰ゐる
光ゐの巴る星祭
雨の蒸乃ねゐ
近所くゐる巴ふ嫁の
碎んぶる跳ス雪乃接

六六 ぬるい部ぐ
喉の癪押し敬役
熱燃の席り結おとと
無面掛る角力ろ
後系せ[illegible]の役
ろ之巴しをする爲を西

六七 ぬらつまやちめ
巨達ハ毋てミツ巴
無蒙もちる坊を毛系
押み容の狭る抽

六八 ぬくを角て
がちく雲ふ井石塩屋
湯治すめる一別系
仏禮罵ふく蓋ふ屋
潜の系で菜り香を
屋乃之味添き百性

六九 塗りぬ
弾傷ろ笑ふ挑対屋
麹屋をちぬちる足
敵づの出る大玄関

(七十) 爲をしゑやて、
因形をおさめぬ寺飾化
神子の操織るふ六月
屏くしげをる 手あるる
列女傳 孔子國乃内
嫁り 指く 豊の 指
大工が笑ふ 古れたら
双殺 井の ゆる 遊
内ま 極 糸 あら女 支
茨屋去すす 毒めて女

おめこ花する 多之 孫宜
きぬく 紡て 饗女の下
ちょいく 茶ら 芭 義武 青
(七一) 顔が 出来
本家の 雲 まるさせる 店
家 老をしく 招 身 彫
店 妻の 嘆 美しい
姫 雲 揚 屋
(七二) ちひげけるの
弾 拙 る 寿 入下女

浦しのみをく皐月雨
耳うちなげの袋ら淋
渋めがくらまてく井ひ柿

七三 奥がが出来
花よおようる寺花屋
ふもに食をする支
女房よ姉とさて役去
後の母とめぬ毒

七四 恩りきせ
雰乃坂と咎人雰

肉の用をなす老婆
能乃侍する前に
撲よ毒母ら
長雲の中小刹ら寺に
ら活り河漁師の子
外ト家よ毒ら妾乃元
寺働つけよすら男
ら汲の銀ふから海屋
亟抱く毒ら角力屋

七五 相まるく

亥乃 漂 ところ 地 蕊
蕊ハ 恪 氣を 仕 接ひ
二階をとりる男 使 迚
迚この 喘 ちの 睦 ゞさ

七六 おゝしさよ
弛ゝを 碧ゝ 迚 仲 西
嗟 拂ひとりや 繪ゝ 北 者
は 吉 矯 却 ッ 婦 女 帝
清 玉 尋 てゝる 仲 居
お寺の 窠 玄 那く 下 女

七七 常ゝひく
土 俵 入ゝ 大 夕 迚
胸 んて 渡す 議 の 人
あまゝくゝ ゝる 新 拵
源 敬 を 紀す 稚 ゝり
嗟 ゝて 外て 芸 元 ゞ

七八 ヨットゝ
ゝゝ 坪 ゝ ゝる 子 紙
舎 新 ゝ 酒 ゝて 用 ⊙
ゝゝ 奴 ゞ 佛 逸 ゝ 也

ぜんきうゝ先へ揚遣り
脊中叩れ奇の様

(七九) ヲヽ寺あり
二人月うる淀市殿
はよ云ハ猫ど箱の内
年業掘ふ廉場立

(八十) ヲヽとうゝ
月雪付ぐへ泣く若る
寝ろでも甲州も呑ぬ事
恵ひよ返りせぬ神社

ろまうゝ遣ふ野の猫
段日よ元て掘ふ
大阪のそ雪郎ふ返出
二階ろも結ふ寺の髪
拍雲うの声きく紺屋
ろうげく亜てろ焼
中雪ろ写も歩に猫拍

(八一) ヲヽ休る
故よふむをく離男
器よかくせど泣く我る

夫の出でゝ辛ひ涙
酒のもじゝ妻生姿
牙揚り多の美妻
女房の美人なく丈那
妻の下女湯乃女
せうとゝ助さ下戸

八二 追う者
衣の擂じやうい世ら
強乃獄を打る柔
美を捕る玉仲右

八三 及び銚子
ゝゝみまだらを出す巨燥
螢おさくる字治の茶屋
盃乃弟ふ胸れゝ同士
鍋の光ぐ呑む生姿
塩茶を出してつる姫
あぢる家よう座敷
江戸ゝ悟元のそひ林

八四 おいとゝ
浪世よるつて仕ら荒

ざっ　お家へ借りよ　寄蘭堂
踏入る　具出来る　毒
須戸を　三匹の　くト白髮
伽羅　弟　得ぬよ

八五　紗まつく
ちばし　沈む　角力取
猪よ　岳つく　帆柱　冥
月の　坐を　する　金弘中
八六　まるづまく
うき世の　義理も　面く　去

屋一上　する　蕊子
屋へ　谷乃　森
夕時へ　婆　同弘
たゞ　仕　ている　松后
菴主の　美を　破る　屋
姉　御　待る　笑さ

八七　美やいて
ちつく　きる　お乳母
糸もおりん　かの　小袖
天合ひの　彼より　多

百性の用立つ雨傘

(八八) 笑たる

猩猩を貸す另上

蓑は八徳つゝ絆屋

仕似せよかゝ宰の茶

裸メらゝ屋拓屋

布子の初日出る十枚

写まよハ下る禁おゝ

(八九) 服用もあん

きらゝ汁入つゝ青竜

攜の中をり猩猩

堰ゝ門トへせある風

女のあるくるのおりん

(九十) 茶もあるゝ

同境を抑て長る縫屋

父の気を強ぐ宿老

遠却かゝ恵ん坊

形を新仁な猿也

味噌の蓋ゝる川支へ

大通の石をゝる孫教屋

形ゑよる新乃新

九一 要ひ為で
帰りも舞る舞の場
琴四の芸箱ふ角力取
便毒縫ふ切っ力持
元日ゑる馬士の孔

九二 借り物て
仲人のるく蟹孔の取
明家の借る地形家
多版おゑ答ふ屋

報恩講勤る新世帯
九三 新出して
今一貫四を経る
毛刷る組み合せ
代物自慢する新屋
蜀士〜一ゑのお家お

九四 かきの者〜
後家ゑ通る義の数
天宗報岡ふ料理茶屋
其那の皮膚を参る場

主縄志やに類加為ひ
性医者よ吃る性酒の
投家の新ゑる戎名場
車て墨つぐ布袋の恵
賀がよつゑいゑ乞
狩伽を参る庵瘡ゑ

九五 弱しても
眼て汐のさ悪の糊
世ぶけ半うてゑひ始
癸トて消しと入し瘡

茅を寄へまゑる
雪のタべの思ひ富
眼ゑ色持く為る二人

九六 庁宰く
寄ゑ寄ゑ升仕業
特を愛すれ毒の母
味し世く色のゑれ二人
国のはびし毒のゑ比
お淡をする池田炭
引船一人り掛乗ど

九七 饗宴のとき
茅原ひろひ 搖手 捕手
麦麩配り 蛭ひる
神の立ちむかふとき
武内 祭の日の妻
如房 下賜の実名書
手代 悪たくみ老女房
拳の悪 拳の悪
九八 風の祭り
水を汲む 沖 紅顔

裏形くに落ちくに来ぬ
芝居よりちくに 鎌倉
碁盤 盤 上る水を
妻 子づれ 馬那
九九 よひ時 ど
今 盃 流
あの 棒 同文 紀文
色ぶ 染う 大の 棒
大酒 呑 宗 旨
切合 ひら 奏 奏

伽世と答底を送る猫

百 青の口

人宮〻如 須戸の秋

時波茅舎入る仲花

こゝのまゝぐへすゝ枝麦

家移り〳〵未〻移帽子

百一 よひぞ〳〵

蕎の目〳〵の比翼同士

お汁が出ゝる蒲桑

雪風歯る碎〻麦

風呂〻〻蕎る麦一枚

〻の八幡祭奥へかける蕎

麦の紙幅て扨〻歯

猫ゝ〻麦ゝ抛る世ひ麦

麦ゝ麦〻〻麦河汁抛

献立の外 雪が降る

雨て〻麦沢 抛 蒲

うめ戸ノ擂たく育る麦

百二 よ抜〻〻るて

配一の〻〻〻花の西

素八月より乃ち私
名所の沖を走り私
糸もうぐいす筑紫縮

(四三) 世ぐ世間の
之前も毋れ塗壺
棹きハしやるおいそ
旅行く布施ヨ一下を伝
地の国も今ハ宮乃蓋
掛人うるる壺の名
売るて注く如らさ

(四四) 旅ひしく
客の彼つ之味深る
風呂まつ入る尼乞する
舞う祇園の私呵る

(四五) 私よ入る
大会を寿寡
国西の出る壺屋嘆
妻の寄る頃妻町
糸をとやむ獄の外る
右糸綱佩て出る私者

(百七) 尋孫
風雅よりまる薬肉を
ぐんの薬屋より求ぬ母
糸名第のて有る細字
不載俗天の荒ぐ
るで和つく思遠
(百八) 大それと
寺の晴るお汁を
乳母のあるを切汁
冷ぬおそて粉を為

後家殺まさ丸頭
山城へより尋び毒
性振と引よ弱くなる
(百八) 大事なん
を見と南テ吾大将
美の弱よ去ぬ京を
ふひ青田を茄る夫ト
とけて仇を付
袋て巾く客の反吐
仇も深で角力アンる

(五九) 邂逅

家をて南やまつぐたま
祇石の清るよ泊又
仏を拜むす寺男

(六〇) 法師して
薮入の出かしゆ妻
川狩より吉井高
弱指を奈をさ亀しが
鞠子の宿とを猿彷
遥ひ丈トへせぬ略乳

芋人甸 亀 馬 牡丹
蚊主の巨燈と出る丁雅
雪戸て風邪をゆく上戸
窮鼠 戸仏女中達
猫の蕊せぬ妻裏
看乃教もあるし山

(六一) 七夕しや
秋水 同士口を吸ふ
四仏物も行ゆさそ
織る寝へちやる牛出び

(百二) 出して見て
茅の抱あり古用丁
新よも使貸さぬ黄ひ海
ぞよてもも古法の味を褒
百目の銀ろに免ム抱ま
苔と茅ふ舶 抱 抱
夫婦 中ひ延し銀
増ぬる 衣裳ふ老ム
(百三) 礼 ふ
中の窪 ろ立ら後ろ

向ひと徒ふしさ寡
友達去ナに碑ふさ夫
石女へ貸しさ無
(百四) 生きくしや
茅ふ琴もつく生の嫁
湯女の抜抜像ろう
牛乳屋服く聟の他
濕しん方ふ茶ム花尺
放しさ医去ろ逢ム井
独で立をする植木冥

雪隠場く来る背と後
伽の落つく見るぬ粥
法の縁の寺男
米を笊にふるい蓋
(夏五) 例よあり
法華経よりの陰くれ茶や
二本目て同の新造買
牽ぢろ脇を仕出ひ白
箱と絡くを恵方柳
(夏六) それしやて

人形ハ小い角姫ひ
神の控でかづく鶴
笊よて仕出るれ眼角
一人去さぬよひ姫
(夏七) 彩晴く
控山を止メろ拍至
雪ちる撥月猫寺
金輩出てみる鉛屋
名の松溝しい海士の内

(草八) 油あひ

酢味噌好んでいる蕊子

物人の門ト通る婦

我こゝ申を云ふ姫

(草九) 傍へ寄り

酒色こゝぬ夫へ云ひ

下女へも形じ嫁の母

情へ寄ふ絹を切ル

型出さる悦在る

内裏淫乱ある事

一家とゆ笑ふ削り魚

商イが仲人をしと和和

吐ハ行く出を前尾

こゝ多こゝ多縛る

鄭ト通ずれを同燈

意の猿ずる花火和

居合ひ云くつる虫盗蜜

夏蕊う燈こゝ拾技

烏のこゝ引こゝ

法鳥が淫乱蕊

百九 そうと出し
おしのをとる妻以
恥しうるさみまいる
大神とる淑女和歌
百十 それハそ
父の性しの生の宿
気絶より育つ鄙の癖
家門と不和る初嫁
百十二 次よして
丁寧とけうる日よる

巻ら徒人合よ寄ら二度目
人ハそるや毛と問ふ毛
百十三 月数ても
やうくとぬふる毛
提灯の辞宜呼る年
居よ係まぬ丈の毋を
百十四 つかれさ
酉角 温人 気赤め
う氣女ハ世の花花
元ろの泣く思牡丹

猫ゝ時ゝ寺の菜

夏五　突出して

人へ命下如乃砂

尾笑ハ乃あら宮山

毋へ乳を走ハ神の孫

大の字形よゝ細宮

夏六　強ふても

投ら毛つゝ別赤のよ

清すの酒ゝや醉ふ人

為ハ乞ハ　ぬ板並在

夏七　差ふ

清潔のを女川流口

抑を生ゝ門選り

帆戸ゝ西ゝ神寵の日

よゝ小さ暖蔭ゝ濃り

夏八　移りて

ゝよ強ゝ自芥蔦子

花尺も魚の　弁

職の女支乃一日路

日ゝさ書蟠ゝ

(百九) 毒ける

小毒味の悪ひ薄戸の辰

お乳母呼つゝ寄る寄る土

姫の布しゐ仕ぶるる

(百十) 寐てたゞる

ちひのゆしさ花瓦の浪

酒て撫姫をとる毒

紙色ハ入ぬ女ぶ

(百十一) 孫ぶゝ

八百屋よ瓦をてゐる姫簪

連へも結茶汲む女房

又沖拙乃抹擣罵ふ

(百十二) 森入りる

高宅の方へふゝ擣

妻ゝすけうん三五の板

ふてうれ必へ鬱の情

孤家泊り女十連

又母の悪しゝ廉塙立

(百十三) 中ぶよひ

ちひ牙ゝをる答ひ

手ぬぐうゝ赤き嫁の紅色
おゝと走り乃ぞうゝ姫笠西瓜
男笠ゝゝ男笠ゝ男入り
西瓜もぞうゝ唐茶橋
ゆうづゝを蒔かぐら
抽釜をせる第二猫

(五四) 何いつゝ
脱んて五ぞう法
教を一ツ駄吸ひの器
多のぞ乃揉よ行

眼ハ紙入に形幸改
中心笑ぞ寺男

(五五) 内ぞう
ぞ乃ぞ乃ぞる毋乃ぞ
和尚を咲よ赤く花屋
新ぞるぞあ大同屋

(五六) ぞんの甚
恥ぐけえトよ入る女
雪の股出川渉る
笑乃てつのる手頁弦

私ターしだうぐ毒う蒲柴
河孫吟て死ヌハ本をよや
又外母よ出る狗定め

(真七) 波風のう
女丈中ようさ寶船
おいうの出さ雛男
う船あぐる飾り馬

(真八) あんだで
三ツ減らうあ果の落さ
章性弱うう綿

実尼字耳庭がうん
絹綿ううあ根引松
あの綿ふうあ多数新造
尼よちうる家合点を出
業の刑ろあ沢がある
産の石行引よう
後ちんキうあ抜くうけ

(真九) 東年は
蛙よるるるはれをぐく
章よ多金のう書信

舞くるる肉の撥
小西をのける老夫婦
ちひ吹くく拍木賣り
尺人樂しき過ぎト
子の約束のあ繼律
吉乃字思ひ樂家法
百ケ遅後ふ法則

(亭) 乱さぐ
二世と出みふ女房
儀の走る繼經

(亭一) 慈願ぐ申ます走く弁
(亭二) むしくく
蚤よ秋明ふ多客
雲居て帰屋ム丁雅
おとぐりで付ト戸
関ぐ一連と吟ふ喜
(亭三) 毋理やふ
紫ふ紫盛とふく母
雪景とし忌房
飯挽かくす車ふり

毋が強く強し

七賢の語猶と驚

おくせまじ技嫁らしん

唐やまみつよかつ水女

二潟へ亘ぎるかー蓋る

百三 むつうしん

春日地位セて育寡

投て唐つく肉ハ尾

まく遅るる入結を

百四 伯接るで

略す場を上を

きの心を級ム培業

いつそうんまふ森てまそ

多恵志めちを結も知恵

す。毒罵じやごぞんを思

百五 嗚して

追善よ

江を通る鎌河連

新費よ弱く神吉の子

四眼丑費ふ奴弱屋

出相の拾ひ物大ひら
百万遍くりかへしの日
如の通ひ事相ひ
娘の新ぞ　よひ事本
奥さまもちもの　慶び
歌しさ　新婦　中紙

(夏)　結び解ひ
砕ひたる仲み
煙草盆　書屋　家
角力取

供養酒のむ　注上戸
(夏)　嬉しさ
新ぞ　新郎　新婦
風呂へ　入る　鏡の
移り　髪のできぬ　新
見る　注出　本の
ぶる　芝居
(夏)　結び
扱ひ　嬉ひ　本の　嫁
妻い　嫌しい　宮　大工

小役深る毒漬

(夏)味ひハく

月よ四橋四り渡り

庁油づてよ積る雪

雨とおんく春る松毒

(夏)婚れ怒し

殺く揚より蓋る

嫁入の門大一下

四十九日を付ける後京

幸ひよ巻て夢ハ羽

つるぎ夢ゆてる奥京

(夏)飛りまてよ

彼く寄ゆ湖に入る客

振りの油きる孫く嫁

蕎麦巻く後てゆる西山

抑ん返る引仲居

(夏)後乃幸

菓漬を巻ゆ上げく

卯毋ハてゆ寝る六枝結

虎屋懐ふす袋 栩

(五三) のこぎりて
絡裏やめり する藪医
汁と煮るせぬ 虎り かご
捨るのに入する 板盃

(五四) 祝 ゝゝ
這ひおが 緑ナがる 系酒
寺 煮る 言と ふ 毒
男の這 入る 恵 捨 引
多 水 盃 ゞ 美 む 掩 摘 ノ 俗
実一 ゝゝ のむ 吐 ゝ

(五五) のり 結 ゝ
沿 船 第 ふ 主 紅
今 ハ 河 の 恵 ゝ る 斗り
ゝ ま こ ハ 山 道 足 痛 む
文 の 奏 ゝ り ハ 賀 振 舞

(五六) の 河 し ゝ
志 の ゝ ゝ 耳 を 沈 を 尾
妻 ゞ 徴 ゝ ゝ ゝ ゝ 線
山 の 帯 中 ゝ ゝ 鈴 ゼ 紅 改
画 ゝ 異 ゝ ゝ ゝ 市 持

鬢乃嬬の菓子る侍女

(五七) 撫 猶〻

お時中 ハ庭作り

法事多作ふ信出され

眼ぐらこやるん意の四五

風勢へり風ハ黄ひ

笠ル布よ多ち嬢

(五八) ぐ〻〻〻〻

氣の庭の病ム黄門ハ

独り淋しう灯へ寄中

ひあを兜よ切る郎冊

女の恋廊乃花やうさ

巳キ支ころふ古用子

(五九) 寸ふるよあり

客ぞくるく鄭のお

爭の改まる浸弁同士

侍女ぢうう多成ぬ新

多〻仕ぞ弟る内黄信

家ぞ立面ふる薄中

(六〇) ぬたしや

ぐら〳〵の堵も歯よ合ハぬ
人形を書くむくひと
制し〳〵と人よ制を乱
多く多く信て異る歟討
多を蓋らく彩る屋
百一 ぐるくくと
辻の地蔵よ彩の縄
一文字に糸屋ぞめき
下戸の並んざ酒の席
思眠も寝ぬ千鳥なき

百二 ふし〳〵稗
門ずけ書る母
文を見送る女人重
市勝のもと二人り連
百三 ふけ〳〵と
当所の浮塩ぬく家内
扇子パッチリ門送り
笠乃ちめる 蛍 物影
世帯の幸さ 鶴手も拍
百四 ふつと来く

あん屠地アて亟妻日和
逮枳咲ふる梅ニ五

百五 心一不盃

嫁入ちーて芳ふ妻
辭く貧爲一枕を沈を
蜜！羅ふ義さ沈を妻

百六 小油茶ても
茶の渉きふれ故人
師通屋の孔仏ふ
出ふのて昇る玉の奥

氣よ愚癡の表贅女
に三味のもふる花の下
田林漬めぬ加りよう

百七 ふが有く
泡りい煮ら沢ぬを煮源女
蒔ふ偽く 下紙
九木彩り 嗤ヌ太
ふふ花ふよ めるみよ
猟ふも山を ふる染
中世北屋をしる蕊ふ

百六 五くこの
后乃月ハ毒を砕ふ
為目をとる曲ハ屋
旅ハ壺のたる夏芝五
吐して壺く仲人医去
枕を寄る旅労き

百九 ちりてれ
下戸を強ふると系鮫
五五どの小豆餅くハぬ
刺ぐらハ せぬ竹掃き

十寿盤ふ角力取
ちひ大ユ 罵ふ漁戸扇五

百十 コリヤ寄妙
張痛のいろる庚申
餅屋ちるる酒の酔
赤金 ちる 虱ミ 紐

百十一 ユリヤ迷惑
タアル連ちる師匠
蛾人のをひ角力衣
躊ち 掃ている木の系

速し速板と略気文
牽引と設の合ふ羽織

百七三 小紋よ

麻ゑるゑもの淵赤海
高麦をあら小弓袖屋
せうふの紋小弓まの為

百七三 比丘ゑ

蓮スぶよの小麦味
牛引弓引も有大二
佛と紫ら 梱

百七四 果報者

麦可つく癖が出る
茂ん願もたくさん
若い狐よ入わくら
四人の親よ麦らく
親と源山の谷多麦
白繋一すく作山れ

百七五 縁べ合ひ

智恩院く附紀出
源人の名ら山ら蒲

生垂て有る所数

(夏六) ふゝ笑布よ沈んする猫

つまゝきもちぬ髮を搔

石男搔る家の弦

二人茶する奥女中

雪降つゝ這入猿出し

(夏七) やゝと

宮殿寄つる達奥夢

寄て、寄つる先の意

蘭代出切る百姓

(夏八) やさしさよ

妻ゝゝゝぬ枕の夢

子の絞り ゝん角力を

子の指 搔る癪の虫

上戸ゝ世ふ白雪糯

(夏九) やゝゝゝ

海苔物の先き拂ひ

帝の付きぬ弦ゝ堂

鍋の口ゝ蛭皮洗ひ

せうゆ入して煮る是人
[illegible]
いかゝ[illegible]が別[illegible]
百十 [illegible]米して
[illegible]山掃除する其那
[illegible]將
冊乃藻釈列女傳
百一 山越えて
[illegible]の実[illegible]の実
大[illegible]する九十の[illegible]

[illegible]の[illegible]竈の[illegible]
百二 まど[illegible]しい
引[illegible]する仲仕
[illegible]の味ハ[illegible]ぬ[illegible]
金[illegible]の[illegible]誠[illegible]
野[illegible]
[illegible]皮むく[illegible]子酒
雛の[illegible]
百三 [illegible]
子猫の[illegible]乃[illegible]

丁雅のまつけ元お付
住吉ト々神 樹しや
出ふの南ふ吾ム奇

百四 ーふそふよ
挑灯 ふ蕪ふて吉ぬ
打る指のふん泥ふ
大体ハ 螢 清 改
係ふ 吉沢料理人

百五 ふしやく
祇の 掾ふて 換湯

略ふ事ふ吉る 数 清
丁雅ガ 第ふつがい 清
略ま砂ふ朱ふ碁のお子
影をやめる 毒の 庵

百六 待 おふを
ろまふと 店 吉沢 古六
ふぬ 略 物る 諸 庵
負ふて ふ 抱て 棒ふ 吉ふ

百七 ま ーふ こ
ふふ 解ふ 対 み

百八十　すゆへ病ら渡り
首尾を言ふ〳〵と言ひ
実ゝの後ゝ後ゝ者乗
婢〳〵の早〳〵迄

百八八　きんぱらゝ
今箱重〳〵　彫如来
重棄ハ女ま奥と口
あいそ　おゝ　こゝ上戸
え妻の名も分り迄
本竹ゝ　徒坊主

百八九　嘸も仲人の七加減
山吹も那傘の縄
張ゝづゝでゝ〳〵君丈ハ粹
待ゝ
函ゝ〳〵ゝ　ゝする判
下戸ゝゝ　ゝ小分ケ飯
眼ゝ〳〵　抱〳〵
山宿て　かする八文移
駅も　ゝ　ゝさ出　彫枕

百九十　ゝ

六四　行住の人通り
多揚りて来く賑する
ゆゝぬ日ハ〳〵毒の伊勢

百五一　家東でも
列を崩し〳〵三日の海
仮橋先く城に於て
子毒よ歩行汁虜

百五二　喧嘩荒して
今ろへ入しる年の切
下駄彫ろ〳〵〳〵〳〵〳〵

若夫の扇を持川斎
鶴毒よ　ゆ毒男づく

百五三　ろふ〳〵〳〵毒一
五膳目　彩しる所母の親
母も用　心する　秋船
水屋ろ　第ふ毒女夫
夫達　濃ゝ東　福寺

百五四　けあり
盗人かろる　秋玉代茶
店ハ志恵　嫁入の　秋

多識乃人をる不自由なれ
男世帯へ豆腐屋客
炉の丁雅男る丁雅

百九十五 不思議して
形代余りてよく人男
大迫う毒あるうるめ妻
大招答なぬさ向ひ
源君ろ男つて考り問
儒と不和なつて利太
鶴の亀まる お熱 仏

分ゞ芋の琴乃所
百九十六 古くをり
喧の亜のもて冥地坊
玉編猫の しさ義足
大夫の下話をくり人
四日乃りをの 紺屋
百九十七 二人しの
略系のこまる裏る翠
一人をこを大井川
三つ電樫く大三十日

門中ぐるまる紙袖屋
外窪して居る橋大工
秋と赤しむ山乃色
咲んてゐる溝新師
羽素の高むぐ実の紙や
地乃奢りのひど枕

(百八) 吹こんん
糸ゑの彼も高味方
近人ら出て来る心中
小女郎ゑ出ん蕊ら

(百九) 枝 ひ
石垣て寄ゑ彼ら出ぬ張る
擲ら出ゑ寄る大丈夫
罵ゑ酒酒のむ男伊達
合ハずゑ居るかしら建
板の下ゑ封中間
結合て出ゑくたぶる音
日本玉を包む延紙

(百) 手紙ふ
お家ゑ出ん擲ら歩

玉の為ちうの古歌書後
一日邪六ようる其
(三百) 丁度よひ
半乃美く夫婦連
ぬイていうく をやく生
殺仕もちうう仕生う
大菅ゆりや出せれ
(三百一) テモ早ひ
髪を出して須反生
おしハ保連よ須く好保

丁ぬ財ど月よ後ひ美
もを集ちく玉乃板
せうふ人写く対を被
(三百二) ちを磨げ
本玉美る眼続美う
ふよ法能さん世く菓子
指巾くいる埴猪や
所よ墨ぬく大字海
名号乃考猪形すよ
をすを届ける船と

三四 紙くず

小門へ志のあやめ賣

田の方指むく角力元

指まの咲るお庵居

居風呂とたく用ゐ不

柳下ろしするお山同士

馬ひ鼻ゝむ伴坂出

師の恵の入ム塚迄デ

系弱所の脊と足毒毒

かうん屋のゝる妹脊中

奈良ハ気もとる系毒

三五 天晴しや

毒よつ毒ゝ毒ん力撥治

小男尺舞てる外料

おゝ主を尼よすゝ丁班

別渡よ渡ゝて豊ゝ喰

云用ゝ毒ひ豬ゝれ

豬屋が恵ゝいせゝ

三六 海へよゝ

塚乃菓拂ひ恵ぶ毒

咲、よ賜の牙踊の師
猫獅子〳〵〳〵袋
家咲〳〵咲笑う毒

(二百七) あんきりじゃ
佛徇若うう赤羽織
初ほうせうふ牙ん女
八濃の双子よ男の子
増挑〳〵ぎぬ釈伽の弟子

(二百八) 釈しい
寺年の新を洗ふ水
ほーの古び振着
猫蓋の〳〵〳〵新茶
井て出芝の裏俗家

(二百九) あとふくと
寺の出て有田乗屋
麦秋の入ん小百姓
勧化を張やく釈仁多
拵〳〵〳〵咲歌

(二百十) 咲ふ
おとの系うう戒

芝居向ひより下雅
客さまかよ入へなにん樫
女中のあるる仲仕演

(三五) あんぢんぐ!!よ
京樽へもりやワレお私
山吹ちゃしを聚沢る
樫よのつるちる蜘蛛
妹縛りるるる特
明る酒りの青の月
たなる行る紅よ切いる髪

油ものを卵ら北
覚るるる水鏡
茂るセるる庵の蔵桂
亭、ゆるるる郭公

(三六) 鶯や先
胸合ゆるる孫生北邦
ーーの絶る八彩赤
骨樫の内二本佩
女房うゆるる会の晩
(三七) 油しやナア

面白の灘うり茶や菊屋
寺の拝理を味ひる奇
本屋町へ来て宝見義
(三十四) あつ〳〵
出羽庄丁もある寺八百や
耳を引ぬく奥女中
大きれ下詰を履く細字
(三十五) 縁人りり
たゝ工合のある花見
酒ふで出る新化濃く

祖合〳〵もたしに庭石
意風の吹く川東
招ぎ〳〵ハ雲ろする雲雨
(三十六) されば〳〵よ
白雑ろもさん年代記
紙ぶれさ吐〳〵すぎおゝ家
花の背を今ゝ見ん
活気ゝ叶ひ〳〵翠簾西
(三十七) 沙法ゝ小
本写れ市抱く藍子

捩して去る。出家法
坊主の出る座敷子
風呂くうめる世話嫁
揺の咲くる姉さん
働仕る妹妻好む
居くく来くいる意廻ひ
名古屋をやく鉢すす汁
三度飯ふふ帯間
町中を急ぐ婦
先金とる仕組

女房呼んだ石仲仕
春乃ふれ狩猟の庭
別る妻のある役去
大名の歩く糸をく
伯父と育てる嫁の卯毋
夜屋く妻ある夫奪
素揺とる裏の蹴

(草八) お使して
舞弘メ世ぬ料理茶屋
宿引る親く笠の紐

小役しまり遣ひて
茶の湯を重く京都
藝子一枝よぶ法
(三九) 掉ちしく
所の寺尺寸五の板
張あおく張れ張
間をおくている代
世よ名をおし拵ふ五徳
月のよりくを張の茶
(三十) さるがしい

そるあくもあさ白し新
紙襖ていろ奴紙屋
さ猫の產
(三十一) さるくしや
塩を少張數ある時に
客をさて赤る湯殿に
雲しは笑る奇妙猪
乃野郎ぐしうさ世
(三十二) 扨もしく
妙抱生しるる士陣

江戸でまとあ地ホとの
嘆くとんとるま燈の灯
夜の妹が捷さうう
三人の三よ入と妹
薮入乃酒呵る母
湯婆めるあうんで
（三三）さうう迚ハ
爲ろくく朱と紐る違ふ
猫がそびくる懐梟徘
男が拭が夏羽織

翁鞠丸牡丹主
ふい〳〵るるよさる逸
多の呵うるいさう毋
（三四）象
ふ黒影ト女きふ書
多沸爲〳〵保の辨宜
影ト宜完る老女房
後京の不乃義ろく絹反
（三五）切うえく
狀之の祭る百幸五

瑞ある丹おきて
於如家納メさ別あの名

(三百六) 急ぐすきぬ
脇はまさ合ぬ 郭公
丁雅のきぐん取る女房
はるの遠ひ紅屋の内
夫のそばの嘴けた
地ゐ口秘舌へ四の隠
毒ゑもをすゝ墨塗り
紙入よ書、書へ 袋

紙附を入る嬉む 懐
枕の金る唐ひ紅脇

(三百七) 形もして
細いを合ひ扇のお
只那の羽織ゆふ高
待女ろ少遠ふ琴の嬢
後へ座つて号
ゐり充車拵る糸ね 碁

(三百八) きぐん母
恵さ拵ぐ 芭 紅

女房持ちぬ角刀取
蓋持上ゝ高の張
雷原て代ゝ繁してる百性

(三九) ゆゝよつ夢
出世のうを初る石寶
房ゝの勝ゝする髮切
頃ゝよ義をやゝ東
(三九) 軍と遠ひ
跡の裏貢とする成り
木賊てうく八斗斗り

板元 大坂心斎橋筋久寶寺町 塩屋平助

大成折句袋 永永年中秀吟 大寄 全一冊

續折句袋 新板 全二冊

折句袋 彩板 全二冊

同おゝ草 全一冊 未刻

折句駒むこう 天明四年新撰秀吟 大寄 全一冊

折句秀詠評林 十五評高判當時 点者の取方を論ず

場附集 一冊

同ゝ場附 ゆゝ碪 一冊

同むゝ 素一冊

同 後篇 一冊

新選場附鼻あぶゝ 七宗匠高判 天明三年新板 一冊

笠附類句集　天明四年新撰　秀吟人寄　全二冊

鬼貫発句集　附録文之賦　全部二冊

孤曲雜纂　初篇二篇一冊完　當世のうかれ仕様

増補京乃町　琴三味線芳年人寄　新家入天明六新板

大成折句庫　寛政二年新板　秀吟大家　全一冊

笠附類句集　青とくさ後篇　寛政二年新板大家

同新雪　全

折句たから　秀吟大家　新板　全

折句箱　全

前句手鑑　寛政二年新板　寺社名所の題句　大家

笠句題選　法花大家　新板

前句奇談　法花大家　新板

日大全　法花大家　新板

笠句題選　法花大家　新板

前句選

前句小筌　前句大家　秀吟法花大家　新板

前句袋　佛方大家　四ノ内　前句秀吟　新板

折句短歌集

折句式大成

折句道志べ

折句集

新選折句大全

絵篇新ものさし　冠附文化新板　大寄

場附早義用

場附五色硯　新版

訓諧武玉川　江戸流行点取たんれん連の句集　紀逸選　吟四篇句集十八冊

同重ねる　二冊

折句杖　寛政年中　全　秀吟

折句種　新板　全

折句柱　新版　全

折句題林集　享和新版　天寄　全

折句いろはし　文化新版　大寄

笠附小柴垣　文化新板　全

狂歌折句式　同々庵了山著　全

同無心抄　著者　全二冊

同大和拾遺　全

えんぶの道　全

百流奇式　紀逸選　全

折句十時　秘哀八絃　白羽評　全

白羽評　大うるう　孫馬

白集らの板行する所の
行年所用を経付て下に板
書数上に板下等之義に板木
彫刻随分上手成こと
板摺本は仕立迄も急
入候らはゝ働こと下賣之義
一ツ候所

諧謔場附笠附
折句前句 新板出来所

板元 南久宝寺町心斎橋
塩屋平助

世間の節用集数多くあれども器財
人倫若しくは言語おのおの門部
の内に云ふべき数ふくの紙数を二十枚
余りの所字を探るを甚だ急用の間
合と山節用の日用元板文字乱雑なるを
門部分僅の文字を附加ふる乃
書そなへ べたくへ体の字をもて
ヤスム合して六書くめる言語門や部

(六)畫 ありの数の字をもて引タラス書
めの乱飛門たる部 (五)畫 まりの門部
び倒よりまべ 紙数と繰及びもて引字部席
に出るべ ぼ見字に好とする和びもし、